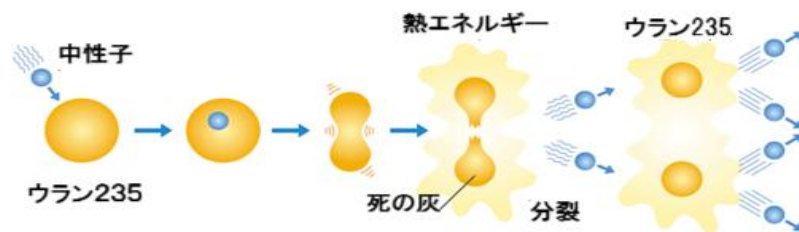


核のゴミって何？

ヒロシマ型原爆の材料であるウラン235に中性子が当たると核分裂し、中性子が飛び出します。倍、倍と連鎖反応が瞬時に進めば核爆発です。

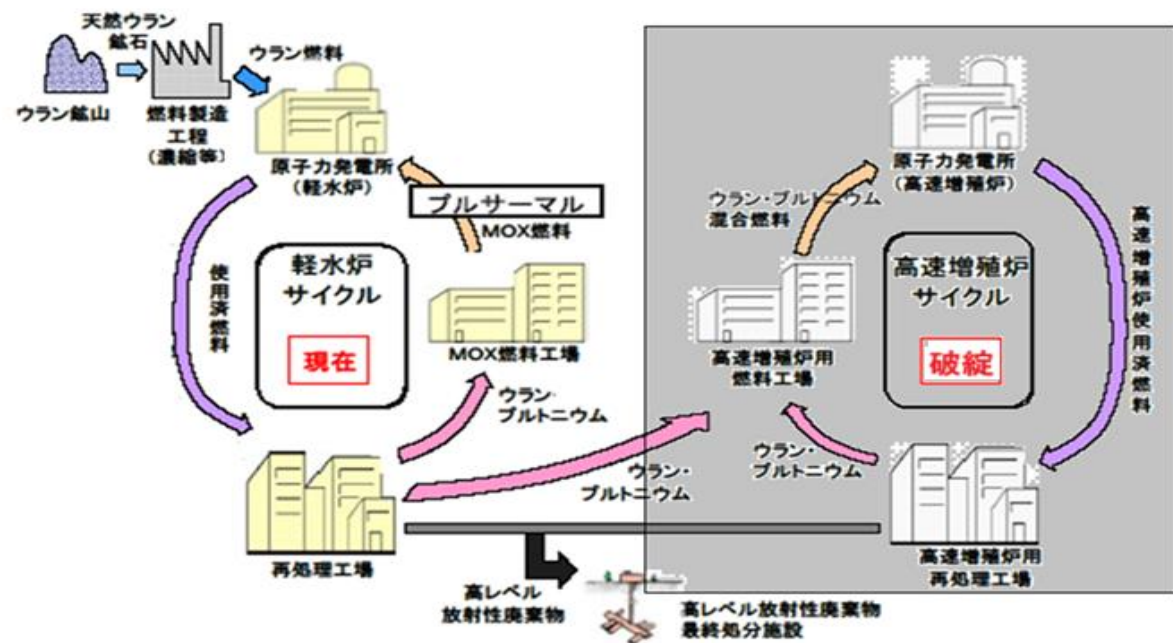


原子力発電所では、制御棒で核分裂をコントロールして徐々に行い、熱エネルギーを利用しています。核分裂自体は原爆と同じで、核分裂によって生じる放射性物質(放射能)は死の灰と呼ばれています。

原子力発電所の使用済み核燃料には、燃え残りのウラン、燃えないウランが中性子を受けて生成された(長崎型原爆の材料でもある)プルトニウムとともに死の灰が含まれています。人間が近づくことができない非常に強い放射線を出す核のゴミなのです。また、放射能が熱を出すため冷却し続けなければ事故につながります。使用済み核燃料の放射能が天然ウランと同レベルの有害度に下がるのに約10万年かかるとされています。

行き場をなくした使用済み核燃料

これまでの原発の運転で使用済み核燃料が各地の原発のプールなどにおよそ2万tU(2万トンウラン)保管されています。国の方針では、青森県六ヶ所再処理工場に運び出し、プルトニウムやウランを回収して利用するはずでした。しかし、1993年に建設開始された六ヶ所再処理工場は、27回も竣工延期を繰り返し、いつ操業開始できるかわからない状態が続いています。そこで、山口県上関町に中間貯蔵することが狙われているのです。



なぜ山口県上関町？

山口県上関町では、1982年に中国電力が原発の建設を計画していることが明らかになりました。

原発設置の準備工事として2010年10月にブイの設置など埋め立て工事に着手されましたが、対岸の祝島を中心に反対運動が取り組まれ、東電福島原発事故もあって、当面、原発新設の見込みはなくなっています。



原発頼みの上関町長が中国電力に原発に替わる地域振興策をおねだりした結果、中国電力が打ち出したのが、原発のために所有する土地に使用済み核燃料中間貯蔵施設を作ることでした。

小規模だと採算上の問題があるから関西電力との共同開発にしたいと上関町に2023年8月に申し入れました。2025年8月にはボーリング調査の結果、「適地だ」とする報告書をまとめています。

関西電力のための計画？

使用済燃料で最も困っているのが関西電力です。残り3～4年で使用済燃料プールが満杯になり、定期検査で交換する使用済燃料の保管場所がなければそれ以上の原発の運転ができなくなる恐れがあります。

そもそも原発を建設するときに、地元「核のゴミは県外に持ち出す」と約束していたため、長年、福井県外で使用済燃料中間貯蔵場所の立地点を探してきました。

例えば、2015年に関電が策定した使用済燃料対策推進計画では、2020年頃に計画地点を確定し、2030年頃に2千トンU規模で操業開始するとされていました。ところが福井県知事との計画地点確定の約束を少なくとも5回守ることができず、謝罪を繰り返してきました。上関の計画は関電にとって渡りに船かもしれません。

